

名詞による呼掛について

——喚体論の視点から——

六 城 雅 章

一 はじめに

名詞による呼掛には、「母よ。」「教師よ。」「花よ。」のように「ゝよ」のような特別な形式の存在を必要とするものと、「山田。」「かあさん。」「社長。」「先生。」「あなた。」のようにそのような形式を必要としないものがあるが、これら二種の呼掛に使用されている名詞はそれぞれいかなる性質をもつものであるのか。また、呼掛に関わる特別な形式として、「ゝよ」以外にどのようなものがあるのか。本稿は、これらの疑問の解決を中心として、「喚体」論の視点から、名詞による呼掛の体系について論じるものである。

二 喚体としての呼掛

山田孝雄氏は、「句」の二大別としての「述体」「喚体」の概念を提唱した。山田氏による「述体」「喚体」の規定は次のようなものである（以下本稿では、引用に際して旧字体は新字体に改める）。

名詞による呼掛について

述体 二元性を有するものにして理性的の発表形式にして、主格と賓格との相対立するありて、述格がこれを統一する性質のものにして、その意識の統一点は述格に寓せられてあるものなり。この故に今之を述体の句と名づく。

喚体 直観的の発表形式にして一元的のものにして、呼格の語を中心とするものにして、その意識の統一点はその呼格に寓せられてあるものにしてその形式は対象を喚びかくるさまなるによりてこれを喚体の句と名づく。
(山田一九三六)

山田氏の規定によれば、「喚体」は「対象を喚びかくるさま」であり、その形式の中心は「呼格の語」であるとされる。

森重敏氏は、山田氏の「述体」「喚体」の概念を発展的に継承し、

〈花よ〉というのは、これもまた呼びかけである。むしろ呼びかけそのものである。喚体とか独立格文とかいうのは、こういうのをこそうべきである
(森重一九七二)

と述べ、「対象を喚びかくるさま」である「花よ。」という呼掛の形式を「喚体」の基底に設定した。そして、森重氏は「花よ。」という呼掛について、次のように述べる。

「花よ。」といふことは「花」が現実の対象であることをあらはす。現実としての「花」は、まさにこの花であつてこれ以外のなにものでもない花、他のいかなる花にも代へることのできない唯一絶対の花、まさにこの時この処においてしかない個性をもつ花である。現実としての「花」はこのやうな個物であり、かく見られた花とかく見ることの表現が「花よ。」である。

(森重一九五二)

すなわち、実現された呼掛における名詞について、「この時この処においてしかない個性をもつ」ことが表わされていると説かれたのである。

川端善明氏は、山田氏と森重氏の「喚体」論を継承し、名詞による呼掛を「呼びかけの喚体」と呼び、「呼びかけの喚体」の特徴の一つとして「一人称二人称的な場における個的性格を負う」点を指摘した（川端一九六三）。川端氏のいう「一人称／二人称」は、一般に「話し手／聞き手」などといわれるものであるが、本稿では、統一的に、「一人称」「話し手」といった、言語場における自称的領域にある者を〈我〉と呼び、「二人称」「聞き手」といった、言語場における対称的領域にある者を〈汝〉と呼ぶことにする⁽¹⁾。

また、川端氏における「個的性格」は、森重氏の「個性」に対応するものであると考えられる。森重氏と川端氏によつて指摘された、「喚体」たる呼掛の「個（的）性（格）」とは、非「個」的なモノが「個」として限定された状態をいうものである。かかる「個（的）性（格）」（以下、用語を〈個性〉に統一する）という視点は、森重氏と川端氏の「喚体」論を理解するうえでは、欠くことのできないものである。本稿はこの視点を、「喚体」の一類としての呼掛を論じるにあたつて積極的に取り入れようと考えているものである。そして、この〈個性〉が、名詞による呼掛において、使用されている名詞が対象を一義的に特定できるか否かということに、深く関わるのである。

ところで、右に言語場における〈我〉〈汝〉について述べたが、言語場における〈我〉〈汝〉の指定が成立するためには、言語場構成以前に、やがて言語場における〈我〉や〈汝〉となる者の存在が前提となる。そこで、言語場における〈我〉〈汝〉に対して、その前提となる存在をそれぞれ〈呼掛主体〉〈呼掛対象〉と呼ぶことにする。

三 〈個性〉をもつ名詞

三節では、「ゝよ」のような形式を必要としない呼掛について考察する。「ゝよ」のような形式を必要としない呼掛は、次のように整理される。

- ① 「山田。」「太郎。」
- ② 「かあさん。」「にいさん。」
- ③ 「社長。」「教頭。」
- ④ 「先生。」「先輩。」
- ⑤ 「あなた。」「君。」

①に使用されている名詞を「固有名」、②に使用されている名詞を「親族呼称」、③に使用されている名詞を「役職名」、④に使用されている名詞を「敬称」、⑤に使用されている名詞を「人称名」と、それぞれ呼ぶ。そして、これら五種にはある共通点がある。それは、呼掛という行為において名詞そのものが〈個性〉をもっているという点である。森重氏と川端氏によって指摘されたように、実現された呼掛に使用されている名詞は、すべて〈個性〉をもっている。したがって、「固有名」「親族呼称」「役職名」「敬称」「人称名」のような〈個性〉をもつ名詞の場合は、「ゝよ」のような特別な形式の存在を必要とせず呼掛となり得るのであると考えられる。

三― 固有な名

「山田」「田中」といった「姓」や「太郎」「花子」といった「名」を、①「固有な名」と呼ぶ。「姓」は社会全体においてある個別の成員を区別する機能をもち、「名」は家族内においてある個別の成員を区別する機能をもつ。この意味において「姓」「名」は〈個性〉をもつ。あだ名・ペンネーム・芸名、あるいはペットの名前なども、固有な名として考えられる。

三― 親族呼称

「とうさん／かあさん」「おやじ／おふくろ」「にいさん／ねえさん」「あにき／あねき」「おじさん／おばさん」「じいさん／ばあさん」など、親族に呼掛を行なう際に使用される名詞のうち、呼掛として実現する場合に「～よ」のような形式を必要としないものを、②「親族呼称」と呼ぶ。また、親族呼称は、鈴木孝夫（一九七三）が指摘するように、系図的下位者から系図的上位者への形式しかもたず、上位者から下位者への形式は存在しない。

「親族呼称」は、〈呼掛主体〉と関係をもつ〈呼掛対象〉を表わしているものと考えられる。つまり、「かあさん」という名詞は、「母」によって指定され得るモノ一般ではなく「〈呼掛主体〉との関係をもつ「個」的な「母」を表わしているのである。

「親族呼称」による呼掛に関して、鈴木孝夫（一九七三）は、二種の「虚構的用法」を指摘している。「虚構的用法」の第一種は、「実際には血縁関係のない他人に対し、親族名称を使って呼び掛けること」をいう。具体的には、通じがりの赤の他人に対する「おねえさん。」「おじさん。」「おばあちゃん。」といった呼掛がこれに当る。第二種は、たとえば、母親による、自分の娘である長女に対する「おねえちゃん。」や自分の夫に対する「おとうさん。」とい

た呼掛をいう。このような現象は、より上位の者が親族内での最下位の者と心理的に同調することによって起こるものであり、鈴木氏はこれを「共感的同一化 empathetic identification」と呼んでいる。

三―三 役職名

ある組織における役職を表わす、企業における「社長」「部長」や学校における「校長」「教頭」など、あるいは会社など臨時的に構成される組織における種の役職を表わすものとしての「議長」「委員長」や「幹事」などの名詞を、③「役職名」と呼ぶ⁽²⁾。

一般に、組織がもつヒエラルキーの構造は、より上位のものは数的に小でありより下位のものは数的に大である、というピラミッド型をなしており、ある組織において〈呼掛主体〉との関係をもつ上位者は、それが表わされる語に對して、基本的には、一人しかない。「課長」とはその「課」の「長」であることの謂いであり、「部長」とはその「部」の、「社長」とはその「社」の、それぞれ「長」である。ヒエラルキーの構造における方向と性質の関係は、下位者から上位者へは「個」的に収斂するものであり、上位者から下位者へは非「個」的に分散するものであるといえる。〈呼掛主体〉の所属する「課」において、「課長」よりも下位であるところの〈呼掛主体〉が「課長」に對して「課長。」と呼掛できるのは、「課長」によって指示される者が「〈呼掛主体〉との関係をもつ「個」的な課長」に、一義的に定まるからである。

役職名による呼掛については、鈴木孝夫（一九七三）による分析が広く受け入れられているように思われる。鈴木氏の分析を本稿にまとめると「同位者及び下位者に對しては、役職名による呼掛は不可となるが、上位者に對しては役職名による呼掛が可能となる」となる。鈴木氏の論に従えば、「社長」職にある者は、下位者に當る「課長」に對

して「課長。」といった呼掛を行なえないということになる。しかし、「課長」職に当る者がその場に一人しかない場合には「課長。」という呼掛は可能である。「社長」による「課長。」という呼掛が不可となるのは、発話の現場に「課長」職の者が複数人存在する場合である。

上位者から下位者をみた場合に、下位者が数的大となる、というヒエラルキーの構造からすれば、「社長」から「課長」をみた場合には、「〈呼掛主体〉との関係をもつ課長」に当る者が複数人存在し、「課長」のみによつては指示される者が一義的には定まらないことになる。それゆえ、たとえば「田中課長。」のように固有名を用いて、指示される者が一義的に特定できるようにしなければ呼掛として使用できないのである。これに対して、「課長」職に当る者がその場に一人しかない場合には、「課長」によつて指示される者が、その現場において一義的に定まるために、「社長」による「課長。」という呼掛が可能となるのである。そして、この「〈呼掛対象〉が一義的に定まる場合においては役職名による呼掛が（上位者・下位者の方向性を問わず）可能となる」という原則は、上位者・下位者間のみならず同位者間においても同様である。

数人で共同作業を行なう際に、「○○係」「△△係」「××係」といった役職を各人に与えたとする。これらの役職の間に上位・下位の別はなく、すべて同位である。この場合、共同作業を行なう数人からなるその組織の成員は、それぞれの役職に当たっている者に対して「○○係」「△△係」「××係」などと呼掛を行なうことができる。その組織において「く係」によつて指示される者が一義的に定まる場合には、同位者（○○係」「△△係」「××係」など）間においても、役職名による呼掛が可能となるのである。

以上、上位者から下位者への、そして同位者間での、役職名を用いた呼掛が可能となる場合について述べた。しかし、いかなる条件の下にあつても役職名を用いた呼掛を行なうことができない場合がある。それは、「〈呼掛対象〉が

役職名をもたない場合である。表わすべき役職名をもたない者に対して役職名を用いた呼掛を行なうことが不可能であることはいうまでもない⁽³⁾。

さて、客から酒場の主人に対して行なわれる「大将」「マスター」などの呼掛がある。「大将」「マスター」などは本来、店主を従業員の立場からみたものであり、役職名である。そしてこのような役職名を、虚構的用法第一種のごとく使用したものが、客による「大将」「マスター」といった呼掛であると考えることができる。つまり、〈呼掛主体〉との関係をもたない者に対して、〈呼掛主体〉との関係による役職名を使用しているものであり、これは、親族関係にない赤の他人に対する「おねえさん」「おじさん」「おばあちゃん」のような呼掛と同様の側面をもつものであると考えられるのである。

三―四 敬称

敬意を以て対象を表わす「先生」「師匠」「先輩」「陛下」のような名詞を、④「敬称」と呼ぶ。敬称は、〈呼掛対象〉を〈呼掛主体〉からみた待遇的關係によつて規定するものであり、それゆえに〈個性〉をもつ。

ここで、本稿にいう役職名と敬称との相違について述べておく。役職名については、先述のように、〈呼掛主体〉と〈呼掛対象〉との間に、これらが共に属する組織のヒエラルキーにおける直接的な関係が存する。対して、敬称たとえば「先生」については、〈呼掛主体〉に学問や技能を教える教師、すなわち〈呼掛主体〉と直接的に関係をもつと考えられる〈呼掛対象〉に対して「先生。」と呼掛を行なうことができるが、他方で、政治家・医者・弁護士・作家など、〈呼掛主体〉と直接的には何の関係をもたない〈呼掛対象〉に対しても、「先生。」という呼掛を行なうことができる、という事実がある。つまり、敬称は、組織の構成とは無関係に対象を表わす名詞なのである。改めて以上

をまとめるに、役職名と敬称とには、役職名が、組織のもつヒエラルキーの構造における〈呼掛主体〉との直接的な関係によって〈呼掛対象〉を規定するものであるのに対して、敬称は、そもそもそのような「組織」を構成せずに〈呼掛対象〉を規定するものである、という相違が存するのである。また、役職名を論じた際に鈴木氏の論を本稿に要約したが、その分析は、敬称にこそ適用されるものである。すなわち待遇的にみて、「同位者及び下位者に対しては、敬称による呼掛は不可となるが、上位者に対しては敬称による呼掛が可能となる」のである。敬称たとえば「先生」「師匠」などと語彙的に対応する「生徒」「弟子」などは、敬意を以て対象を表わすものではなく、敬称ではない。一般に、「敬称」は、「先生」のように、名詞的すなわち単独で使用可能なものと、「くさん」のように、接辞的すなわち単独では使用不可能なものと、二つに分けられる⁽⁴⁾。そして、後者接辞としての敬称は、後述する「待遇的關係規定」の形式と対応するものである。

三一五 人称名

「私」「あなた」など、言語場における人称領域を表わす名詞を、⑤「人称名」と呼ぶ⁽⁵⁾。呼掛は、〈我〉が〈汝〉に行なうものであるから、言語場において呼掛に関係するのは、自称の〈我〉と対称の〈汝〉である。他称の〈彼〉と不定称の〈誰〉は関係しない。

「人称名」は、語彙的には、一人称名（私）「俺」「僕」など・二人称名（あなた）「おまえ」「君」など・三人称名（彼）「彼女」など・不定称名の（誰）などに分けられる。これらのうちで呼掛に使用されるのは一人称名と二人称名の二種である。

二人称名が呼掛として使用可能であるのは、これが、言語場における「今・茲・我」からみた〈汝〉を直接的に指

定する形式であることによる。言語場において〈我〉と対峙する〈汝〉は「この時この処においてしかない個性をもつ」のである。

一人称名が使用される呼掛について。第一に、自分自身に対する「がんばれ、俺。」「負けるな、私。」のような呼掛がある。これらは、客観的にみた自分自身を〈汝〉に位置させ、その〈汝〉としての自分自身に向って〈我〉としての自分自身が呼掛を行なっているものと説明できる。第二に、男児に対する「ぼく。」という呼掛がある。第一の自分自身に対する呼掛とは異なり、他者に対して一人称名（ぼく）を使用しているものである。これは、共感的同一化（＝男児に心理的に同調する）が行なわれ、その男児からみた男児自身を指定する人称名としての「ぼく」を使用していると説明されるものである⁽⁶⁾。

語彙的に三人称名である「彼女」も「彼女。」のように呼掛として使用可能である。しかし、この場合の「彼女。」は、人称名というよりもむしろ、親族呼称の虚構的用法の第一種としての「おねえさん。」と等価に考えるべきものであると考えられる。

右に、一人称名と二人称名が呼掛に使用可能であることを確認したが、これらは、一人称名・二人称名を、言語場における〈汝〉の資格において使用しているがゆえに可能となるのであり、すべて〈我〉―〈汝〉関係においてあるものである。

四 〈個性〉をもたない名詞

四節では、「ゝよ」のような形式を必要とする呼掛について考察する。「ゝよ」のような形式を必要とする呼掛は、次のように整理される。

⑥「母よ。」「兄よ。」

⑦「教師よ。」「その学生。」「お医者さん。」

⑧「花よ。」「その人。」

⑥に使用されている名詞を「親族名称」、⑦に使用されている名詞を「職業名」、⑧に使用されている名詞を「概念名」と、それぞれ呼ぶ。⑥～⑧は、名詞が「～よ」「その～」「お～」「～さん」といった形式を伴うことによって呼掛となっているものであり、これらの呼掛から「～よ」「その～」「お～」「～さん」を除くと呼掛として実現できなくなる。

「～よ」のような形式がなくとも呼掛となり得る名詞は、既に述べたように、〈個性〉をもつものであった。そうであるならば、呼掛としての実現に際して「～よ」のような形式を必要とする「親族名称」「職業名」「概念名」は、それ自身は〈個性〉をもたない名詞であるといえよう。以下では、まず「～よ」「その～」「お～」「～さん」といった形式について述べ、その後で⑥～⑧の名詞について述べる。

四——〈個性〉化形式

実現した呼掛に使用されている名詞はすべて〈我〉——〈汝〉関係における〈個性〉をもっている。「母」「教師」「花」などの名詞はそのままでは呼掛となり得ず「～よ」のような形式の存在を必要とする。これは、「母」「教師」「花」などの名詞が〈個性〉をもたず、「～よ」のような形式の存在によって、「～よ」などを含めた「母よ」「教師よ」「花よ」の全体が〈個性〉を獲得しているということである。これを「〈個性〉化」と呼び、〈個性〉化に関わる「～よ」のような形式を「〈個性〉化形式」と呼ぶことにする。この〈個性〉化形式には「呼掛詞由来」の形式と「空

間的関係規定」の形式と「待遇的關係規定」の形式との三種があり、以下、これらについて述べる。

四—— 呼掛詞由来の〈個性〉化形式

次のような呼掛がある。

- ・「ありがとう、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい声を放って泣いた。〔『走』⑦〕
- ・雪やこんこ霰やこんこ。降っては降ってはずんずん積もる。〔『雪』〕

右に挙げた呼掛は、〈個性〉をもたない名詞「友」「雪／霰」が「よ」「や」という形式を伴って呼掛となっているものである。これらの「よ」「や」という形式を「呼掛詞由来」の〈個性〉化形式と呼ぶ。

「よ」「や」という形式が呼掛に關係するのは、これらの助詞が、原理的にみて、ヤ行系呼掛詞に由来するものであることによる。「呼掛詞由来」の〈個性〉化形式は、〈個性〉をもたない名詞を、言語場における〈我〉と〈汝〉との時間的・空間的な關係、すなわち「今・茲・我」からの關係として対象を指定することによって、その〈個性〉化を果たすものであると考えられる。ヤ行系呼掛詞をはじめとして、「おい」などをも含めた呼掛詞一般は、まさしく〈我〉——〈汝〉の言語場を構成することに特化した形式なのである。森重氏による「この時この処においてしかない個性」（森重一九五二）及び「花よ。」は「花」に対する自覚的態度すなわち「花」に対する認識のその時間空間的な形式的統一の立場であり」（森重一九五六）という説明は、まさに「よ」「や」という形式の、「今・茲・我」からの關係規定性について述べたものであると理解できる。

四——二 空間的關係規定の〈個性〉化形式

次のような呼掛がある。

・ おーい、おーい、そこのヒト！ (『フ』)

右に挙げた呼掛は、〈個性〉をもたない名詞「ヒト」が「そこの」という形式を伴って呼掛となっているものである。また、「そこのヒト。」以外にも「そこにいるヒト。」「そこで本を読んでいるヒト。」なども可能な呼掛である。このような「そ」という形式を「空間的關係規定」の〈個性〉化形式と呼ぶ。

「そ」という形式は、〈個性〉をもたない名詞を、〈我〉と〈汝〉との場所的空間的關係規定から〈個性〉化するものであると考えられる。「空間的關係規定」の〈個性〉化形式を用いた呼掛「そこのヒト。」は、「一般的概念としてのヒト」ではなく「〈我〉と空間的に対峙する〈汝〉としての〈個性〉をもつヒト」に対する呼掛なのである。

笹井香(二〇一五)が指摘するように、「空間的關係規定」の〈個性〉化形式として現われるのは、「ソ」系の「そこの」などに限られ、「コ」系の「この」などや「ア」系の「あそこの」などは現われない。これは、「ソ」系が、〈我〉が〈汝〉領域のものを指示する「〈我〉——〈汝〉」構造の形式であるのに対して、「コ」系は〈我〉が〈我〉領域のものを指示する「〈我〉——〈我〉」構造の形式であり、「ア」系は〈我〉が〈彼〉領域のものを指示する「〈我〉——〈彼〉」構造の形式であることによる。つまり、「コ」系及び「ア」系は、言語場における「〈我〉——〈汝〉」の構造をとり得ないのであり、それゆえに、〈個性〉化を果たす形式ではあっても、呼掛と関わらないのである。といえは、「固有名」「親族呼称」「役職名」「敬称」は、言語場以前に予め〈個性〉をもつ名詞であったが、これらが呼

掛として使用可能であるのは、単に「〈個性〉をもつ」というだけではなく、これに加えて、言語場における「〈我〉—〈汝〉」の構造をとり得るという性質をもつことにもよるのである。

四——三 待遇的關係規定の〈個性〉化形式

次のような呼掛がある。

・お医者さん。わたくしおあしなんか一文もないのよ。(〔ひ〕)

・母君、風が止みませんね(〔淳〕)

・母上、同乗して来たお方が、あの様に申して下さいますが、船中で変ったことでもあったのでございますか(〔梅〕)

右に挙げた呼掛は、〈個性〉をもたない名詞「医者」「母」が「お」「さん」「君」「上」という形式を伴って呼掛となっているものである。これらの形式を「待遇的關係規定」の〈個性〉化形式と呼ぶ。「御」「様」「様」からの派生形式である「～さん」「～ちゃん」などをも統一して「～様」と示す。「～君」「～上」という形式は、〈呼掛主体〉からの待遇的な關係規定において、〈個性〉をもたない名詞を〈個性〉化するものであると考えられる。「母上」は、「母一般」ではなく、「〈呼掛主体〉との特別な待遇的關係をもつ「個」的な母」に対する呼掛なのである。

ところで、「女ども、あちらへ行け！ 早く行け！」(〔吉〕)のような呼掛がある。「女」は、〈個性〉化形式なしには呼掛とならないが、その「女」に「～ども」が接すると「女ども。」として呼掛となるのである。この現象については、『日本国語大辞典』(第二版)の「ども」の項目に「③人を表わす名詞に付いて、相手への呼びかけとする。目下の者に対する時で、単数の場合がある。「女ども」「野郎ども」など」という記述がある。そして、実は、「～ども」

の対応者である「～たち」「～ら」「～がた」についても、「ごらん、弟たち——むこうが池だよ!」（『公』）「娘ら。」
「さあ、奥方、退散だ。」（『ア』）のように、同様の現象がみられるのである。

「～ども」「～たち」「～ら」「～がた」は、複数性云々についてはひとまず措き、呼掛における〈個性〉化という視点からみるならば、上接名詞を、尊卑・親疎といった待遇的關係によって規定する形式であると考えられる。ここから、本稿では、「～ども」「～たち」「～ら」「～がた」を、「御～」「～様」「～君」「～上」と同様の、待遇的關係規定の〈個性〉化形式として位置づけたい。

四——四 〈個性〉化形式の「融け込み」

以上に述べた〈個性〉化形式は、大きく二つに分けられる。一つめは、〈我〉——〈汝〉という言語場の構造において名詞を〈個性〉化するものであり、「呼掛詞由来」の形式と「空間的關係規定」の形式がこれに当る。二つめは、言語場の構成以前に、〈呼掛主体〉との關係において、名詞を〈個性〉化するものであり、「待遇的關係規定」の形式がこれに当る。〈個性〉のありかたからみれば、「呼掛詞由来」の形式と「空間的關係規定」の形式は人称詞と対応的であり、「待遇的關係規定」の形式は親族呼称・役職名・敬称と対応的である。

ところで、呼掛には、笹井香（二〇一五）の指摘する「研修に参加する人!」のようなものがある。かかる呼掛について笹井氏は「呼び掛ける対象を指定できるだけの修飾語を備えた名詞も呼び掛け文として運用される」と述べる。現象の記述としてはそのとおりであるが、本稿ではこのような呼掛を、〈個性〉をもたない名詞（人）の外延を一時的に狭めることによって、現場性に支えられて〈個性〉化が果たされたもの、と分析する。そして、このような〈個性〉化は、本稿においては、あくまでも臨時的な、その場限りにおけるものと位置づけられるに留まる。なぜ

ならば、本稿は、ある名詞が本来的に〈個性〉をもつか否という点に着目するものであって、現場性の支えのみによつて成立する呼掛は、関心の中心にはないからである。

さてここで、親族呼称「かあさん」に「くさん」という要素を析出してみる。そうすると、「かあさん」には、既にその内に「待遇的關係規定」の〈個性〉化形式「く様」が含まれているのだと考えることができる。このような、名詞に〈個性〉化形式が分ちがたく含まれているという固定化的現象を、〈個性〉化形式の「融け込み」と呼ぶことにする。「じいや」「ばあや」なども、元々は「爺／婆」＋〈個性〉化形式「くや」であろうが、「分かつたわよ、ばあや」(『灰』)のような呼掛用法の他に「ばあやは、窓のそばで顔だけをこちらへ向けた」(『灰』)のようにも使用される。このことから、〈個性〉化形式の「融け込み」がなされた全体が一つの名詞となっていることがわかる⁽⁸⁾。

四―二 親族名称

「父／母」「息子／娘」「兄／姉」「弟／妹」「孫／孫娘」「甥／姪」「祖父／祖母」「おじ／おば」「夫／妻」「いとこ」など、親族一般における関係のみを明示する名詞を、⑥「親族名称」と呼ぶ。親族名称は、〈個性〉化形式を伴わなければ呼掛として実現できず、〈個性〉化形式を伴った「母上」「母よ」であれば可能となる。親族名称「母」は、「子」や「父」に対する関係規定において把握されている。にもかかわらず、名詞「母」が〈個性〉化形式なしに呼掛として実現できないのは、この関係規定が〈呼掛主体〉や〈我〉とに限定されないものだからである。親族名称「母」は単に親族語彙の体系内における「母」を表わしているのであり、対する親族呼称「かあさん」は、「呼掛主体」との関係をもつ「個」的な母」を表わしているのである。

四—三 職業名

「教師」「学生」「医者」など、対象の職業の名を表わす名詞を、⑦「職業名」と呼ぶ。「社長」といった役職名や「先生」といった敬称が〈呼掛主体〉との関係性ゆえに〈個性〉をもつものであったのに対して、職業名は対象の職業を表わすだけのものであり、〈個性〉をもたない。

ところで、職業名の中には、「おまわりさん」「おすもうさん」のようにそのまま呼掛となり得るものがあるが、これは「御々」「様」という〈個性〉化形式の「融け込み」がなされていることによるものと考えられる。

四—四 概念名

「花」「人」「友」「雪」「霰」など、対象の概念的な名称を表わす名詞を、⑧「概念名」と呼ぶ。概念名は、対象の一般的な概念を表わすものであり、〈個性〉をもたない。また、特に対象が人間である場合には、「女」「若者」など、性別・年齢などによる分類を表わす名詞を呼掛に使用することが多い。たとえば、対象の髪型・髪色・体型・服装・所持品・装飾品など、その特徴的な一部分を取り上げた「金髪」「帽子」といった名詞も同様に、概念名として考えられる。

概念名のうち、対象の性別・年齢による分類を表わす「奥さん」「奥方」「坊や」「坊ちゃん」「お嬢さん」などは、そのまま呼掛となり得るが、これも「おまわりさん」などと同様に、その内に〈個性〉化形式の「融け込み」がなされているためであると考えられる。「奥さん」「奥方」「坊ちゃん」「お嬢さん」には「待遇的關係規定」の、「坊や」には「呼掛詞由来」の、「個性」化形式の「融け込み」がそれぞれなされているのである⁽⁹⁾。

——以上、便宜的に、〈個性〉をもたない名詞を、親族名称・職業名・概念名に分類したが、実は、これらはすべ

て対象の一般的な概念を表わすものであり、概念名における下位類である。

五 ま と め

呼掛に使用される名詞は、「〈我〉—〈汝〉関係」及び「〈個性〉」という視点から、「固有名」のように、言語場構成以前に、予め独自に〈個性〉をもち、かつ、言語場における〈我〉—〈汝〉の構造をとり得る名詞（仮に「第一種名詞」としておく）、「親族呼称」「役職名」「敬称」のように、言語場構成以前に、予め〈呼掛主体〉との関係によって〈個性〉をもち、かつ、言語場における〈我〉—〈汝〉の構造をとり得る名詞（≡第二種名詞）、「人称名」のように、言語場における〈我〉に対する〈汝〉の位置にあることによって、〈個性〉をもつ名詞（≡第三種名詞）、「親族名称」「職業名」「概念名」のように、〈個性〉をもたない名詞（≡第四種名詞）の四種に分けることができる。

- ・ 第一種名詞 …… 固有名
- ・ 第二種名詞 …… 親族呼称・役職名・敬称
- ・ 第三種名詞 …… 人称名
- ・ 第四種名詞 …… 概念のみを表わす、〈個性〉をもたない名詞

そして、第四種名詞を用いて呼掛を行なう際には、「呼掛詞由来」「空間的關係規定」「待遇的關係規定」の〈個性〉化形式の存在を必要とする。また、第四種名詞においても、その内に〈個性〉化形式の「融け込み」がなされており、そのまま呼掛として実現できるものがある。

以上、冒頭に掲げた疑問の解決を中心として、「喚体」という文法概念の視点から、名詞による呼掛の体系につい

て論じた。個々の用例について考察すべきことは残されているが、ひとまずの擷筆とする。

註(1)

呼掛は、〈我〉の〈汝〉に対する行為である。呼掛には、対象が、遠く離れた場所にいたり故人であったり、あるいは空想上の存在であったりして、現実的に、言語場における〈汝〉として〈我〉の目前に立ち得ないという場合が考えられるが、その場合にあっても、〈我〉が〈汝〉を現場に仮構して、呼掛を行なっていると考えられる。言語場における〈汝〉については、対象が〈汝〉に位置することを述べれば足りるのであり、それが現場に在るか否かを問うことは、文法論においては不要であると考ええる。

(2) 本稿にいう「役職名」は、一般的にいわれる「役職名」よりも、やや広く用いている。

(3) 呼掛についての論ではないが、金井勇人氏が「下位者については、対応する普通名詞が存在しない(使用できない)、という場合が多い。例えば、役職のない部下を、普通名詞で指示することは、不可能である」(金井二〇〇三)と述べておりである。

(4) 『国語学大辞典』、『日本国語大辞典』(第二版)、『日本語大辞典』(第二版)など。

(5) 人称名は、名詞と区別して代名詞とされることもあるが、本稿では名詞として扱う。

(6) 鈴木孝夫(一九七三)を参照。

(7) 用例の出典は、稿末の略記に従って示す。

(8) 松村明編『古典語現代語 助詞助動詞詳説』の「や」の項目(宇野義方氏執筆)に「呼びかけを表わすことから転じて、人をさす場合、「坊や」「ねえや」などのように、下に添えて用いることがある」という説明がある。なお、先に親族呼称として挙げた「あにき／あねき」は、『日本国語大辞典』(第二版)によれば、「あにぎみ(兄君)／あねぎみ(姉君)」の転じたものであり、「ゝき」に対する「ゝ貴」の字は宛字であるという。この解釈を採り、本稿では「あにき／あねき」を「名詞の親族呼称と認め、「ゝ君」という〈個性〉化形式の「融け込み」がなされたものであると考え、新たに「ゝき」という〈個性〉化形式を立てることはしない。

(9) これらの他、「坊主」「小僧」などは、さらに特殊な形式であり、現象上、〈個性〉化形式がなくともそのまま呼掛となり得る(「坊主。」「小僧。」。ただし、これらの名詞が〈個性〉化形式なしに呼掛となり得る理由については、文法概念とし

名詞による呼掛について

ての「喚体」の視点から論じるよりもむしろ、個々の名詞についての語誌的な研究に拠るべきであると思われるため、本稿では現象を指摘しておくに留める。

参考文献

- 金井勇人（二〇〇三）『普通名詞による二人称指示と間接化というストラテジー』『国語学研究と資料』二六・早稲田大学
 川端善明（一九六三）『喚体と述体——係助詞と助動詞とその層——』『女子大文学』一五・大阪女子大学
 笹井 香（二〇一五）『呼び掛け文』『日本文藝研究』六六―一・関西学院大学
 鈴木孝夫（一九七三）『ことばと文化』岩波書店
 松村明編（一九六九）『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社
 森重 敏（一九五二）『間投助詞から終止としての係助詞へ』『国語国文』二一―五
 森重 敏（一九五六）『間投副詞から発始としての係副詞へ』『国語国文』二五―二
 森重 敏（一九七二）『日本文法の諸問題』笠間書院
 山田孝雄（一九三六）『日本文法学概論』宝文館

用例出典

『走』太宰治『走れメロス』／『雪』作詞者不詳・文部省唱歌『雪』／『ブ』宮部みゆき『ブレイブ・ストーリー』下／『ひ』宮沢賢治『ひのきとひなげし』／『淳』三枝和子『淳和院正子』／『梅』吉川英治『梅麿の杖』／『吉』菊池寛『吉良上野の立場』／『公』P・L・トラヴァース（林容吉・訳）『公園のメアリー・ポピンズ』／『ア』マルキ・ド・サド（原好男・訳）『アリスとヴァルターあるいは哲学的物語』上／『灰』草鹿外吉『灰色の海』

（ろくじょう つねあき・関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程）